令和５年度　北九州市高齢者支援と介護の質の向上推進会議
第２回　認知症施策推進に関する会議（オレンジ会議）　会議録

1　開催日時

令和5年11月6日(月)　19 時 00 分～20 時 30 分

2　開催場所

北九州市総合保健福祉センター2階　講堂

3　出席者等

(1)構成員(12 名／16名)

石田構成員、伊藤構成員、今村構成員、岡構成員、小野構成員、甲木構成員、木戸構成員、後藤構成員、野村(尚)構成員、野村(美)構成員、堀田構成員、前田構成員

(2)事務局

総合保健福祉センター担当理事、技術支援部長、地域福祉部長、認知症支援･介護予防センター所長、長寿社会対策課長、地域支援担当課長、介護保険課長、介護サービス担当課長

4　議事内容

(1)次期高齢者プランについて

(2)北九州市オレンジプランについて

5　報告

(1)　認知症啓発月間について

6　意見交換等

議題(1)について事務局から説明

(代表)

前回、皆様方からご意見等々もいただいているところでありますけれども、このような試案にまとまっているということでございます。

皆様の方からご質問とか確認事項とかございましたら、ぜひ出していただければと思います。いかがでしょうか。

別添1の資料の方にも書いてありますように、調査結果を踏まえた上で課題を生み出して、そして次期プランの目指すビジョンということで目標設定してあるという流れになっております。

（構成員）

この三つの目標、とても素晴らしいと思います。

特に、「人情息づく支えあいのまち」というスローガンはすごくいいと思うのです。ただ、これが何で出てきたのかなと思うと、おそらく、社会資源がなくて、人材もいらっしゃらなくて、介護費も少なくなってきて、そうすると多分、ボランティアの方とか、そういった方にちょっと頼らざるを得ないとかいう、そういうちょっと事情があるのではないかと勝手にちょっと思っているのですが、その辺はいかがでしょうか。

もし、そういう事情であれば、やっぱりもうちょっと市民の皆様に、そういう事情をアピールするようなスローガンですね。温かさとか、ちょっとそういったものを少しアピールした方が良いのではないかと思いますがいかがでしょうか。

（事務局）

「人情息づく」というのは、一つは北九州市が政令指定都市の中でも、いち早くふれあいネットワークという形で、市民センター中心に地域づくりを取り組んできたその中で、特に政令市と言いながらも、少し人との繋がり、顔の見える関係が見える自治体ということで、それを一つ言葉に表したということで「人情息づく」というような表現をさせていただいております。

それともう一つは、現在、私どもは地域包括ケアシステムを構築している中でございますけれども、この中で、自助、共助、互助という、基本的に自立できる、自分でできる人は自分でやる。そして助け合いの中で、生活を支えるときは互助。最終的に介護保険などの制度が必要な公的な制度が必要な部分については公助というような、それぞれの自助、公助、共助の役割の中で、それぞれを我々としてはまちづくりを進めていきたいというふうに考えておりまして、もちろんこれから労働人口が減っていくという中で、人も少なくなってくるというような側面もございますけれども、基本的には今から地域包括ケアを支えていく中で、市民一人一人の力添えも助けもいただきながら、我々としては地域づくりに取り組んでいきたいということで、「人情息づく支え合いのまち」というような表現にさせていただいたところでございます。

（構成員）

はい。よく分かりました。

（代表）

もちろん専門職や福祉サービス等々も充実する上で、今までの培ってきたネットワーク、ふれあいネットワークなんかを、さらにかもし出しながらということだろうと思います。

（構成員）

今、おっしゃっていた、「人情息づく支え合いのまち」というところでですね、施策としてと、それから主な取り組みの点で、対応職員の研修強化っていうのがあるのですね。それと多職種連携の強化ですけど、このところで県の要請を受けまして、多分、介護福祉士会もそうですが、看護協会とかケアマネとかも、認知症の向上研修というのをやっているのですが、介護支援専門員の場合はどうしても義務化されてますから、受ける方も多いのですが介護福祉士会とかなかなかこの頃受ける方が少なくなって、できればこれは要望なのですけど、北九州市においても、何かそういった研修を取り組んでいって欲しいなと思っています。できましたらよろしくお願いします。

それとこの研修ですけど、皆さんご存じのようにやっぱり介護する方が減ってきていますので、かなり研修に出向くのが非常に厳しい状態になっています。そこのところで介護人材のことについても少し目を向けていただくように、お願いできたらと思っております。

よろしくお願いいたします。

（代表）

要望ということでよろしいでしょうか。

（構成員）

先ほどの別添の 4 ですけど、全体的にとても多量な資料というか、計画を立てていただいて本当にありがとうございます。

ただ、ちょっと量が多いと分かりにくくなる面も、そのメリハリのところあるなっていうのもあったのですが、別添 4 のところのビジョンですね、「高齢者が健康で生涯現役を目指し、自分らしく安心して 100 年時代を幸福に暮らすことができるまち」ということで思ったのですが、この生涯現役っていうのが、これがどういう意味なのかっていうのがあって、認知症とかになると、現役っていうのもなんかどうなのかなっていうこともある。逆に 100 年、100 歳まで現役を強いることになっている、なりかねないっていうか、ここら辺のバランスみたいなのがちょっと疑問に思ったので、説明していただけたらと思います。

（事務局）

ビジョンとこの生涯現役というところと、どうしてもやっぱり認知症が出たりとか、そういっ

た身体に支障が出たりとかいうところが出るので、その辺もバランスをというところだったかと思うのですけども、このビジョンのところは下に書いてある、「目指そう活力ある 100 年」というところで、もちろんできる限りというところがあるのですが、今、高齢者人口が 29 万人を超えて、その内介護認定をされている方は、その内の 6 万人ぐらいだったかと思うのですけども、できるだけ長く健康で長生きする、していただけるように高齢者の皆さんも頑張っていただいて、介護予防とか健康づくりに取り組んでいただく、いろんな社会参加に参加していただくというところで、できるだけ支える側に回っていただくという意味で、生涯現役というところを書かせていただいているのですが、必ずしもその生涯現役が、もちろん途中に病で倒れたりとか、認知症が出たりということもございますので、そこは全部が 100 歳という意味でなく、できるだけ長く支える側という意味での、生涯現役と書かせていただいているところです。

（構成員）

現役っていうところはですね、現役の反対はリタイアになるのですね。現役とリタイアという対比で、どうなのだろうかという、御発言だったじゃないかと思ったのですけど。

私の立場で考えると、認知症になったとしても、現役でいてほしいというよりも、主人公であってほしいと私は思うのです。

だから、意思決定が自分でできなくなっても、それを補助してあげて、自分がやっぱり主役というニュアンスの単語の方が良いかなという意見です。

（事務局）

いやもうそのとおりでございます。ありがとうございます。

今回は自己決定というところを幸せの 3 要素の一つに選ばせていただいているとこもありますので、今、構成員が言われたとおりでございます。

（代表）

ありがとうございました。おそらく全構成員の思いだろうと思います。

作られた事務局の方もそうだろうと思いますので、ぜひよろしくお願いします。

（構成員）

今のお話大賛成です。

別添 2－1 で目標というのがあって 1、2、3 とあります。

真ん中の 2 共生、地域共生社会のまちづくりということですけど、例えば、私たちの事業は 5 年前にグループホームを立ち上げて、地域の民生委員さんとか、それから御家族とか、それから自治会の方を交えて、委員会を開いているんです。

本当にアットホームで地域と連携しているというイメージがありまして。そういう意味でいうと、やはりそういう地域と連携することが本当に大事だな、いわゆる「係わる」ということが大切だと思っております。

そのために、先ほどの構成員から言われた、例えば介護の人材確保とか、質の向上、それから在宅医療介護連携の推進、ここら辺の付随した充実が必要になってくるというふうに考えています。

いずれにしても、この 2 番の高齢者と家族、地域が繋がり支え合う地域共生社会のまちづくり、ここを非常にピックアップして、大事に進めていって欲しいなと思うところです。

（構成員）

この高齢者と家族、地域が繋がり支え合うというところで、どうしても子どもたちが入ってこないのです。

先日も私の校区で迷い人捜索模擬訓練をしたのですが、子どもたちがいない。小学生、中学生がいない。そういう中で、なかなか人が出てこなくなった。これはコロナの影響で、コロナ前までは、子どもたちも来られていたのですけども、そういう、今から社会を担っていく、小学生、中学生そして高校生になるわけですが、そういう方たちの顔が見えないんですね。

もうちょっと、そういう子たちが今、街の中で、多分、公園で小さい子どもたちが遊んでいますが、そういうところの繋がりというのが欲しいなというふうに思います。

議題（2）について事務局から説明

（代表）

次に、北九州市のオレンジプランでございます。これについて御意見をいただきたいので、少し時間を取りたいと思いますので、何か御質問とか御意見とか、確認とかございましたらお願いしたいと思います。

（構成員）

資料 2－1 の 2 ページ目。

認知症にやさしいまちづくりの①番の主な取り組みの中に、認知症にやさしいデザインの普及という新規事業が入っていますけれども、これは具体的にはどういうことなのか教えていただけますか。

（事務局）

認知症にやさしいデザインというのは、例えば表示とか、色の使い方によって、認知症の

方が混乱したり、困ったりすることを防ぐようなデザインがあります。そういったものを普及していこうということで、今年度は１回、９月に講演会をしております。

来年度も引き続きそういった考え方などについて、啓発を行っていきたいと考えています。

（構成員）

ありがとうございます。啓発を行う相手というのは、民間の建設業者とか、そういう方たちっていうことなのでしょうか。

（事務局）

今年度は、一般市民の方を対象ということで、講演会をしましたけれども、建築関係の方とか、それから保健福祉に関する方にも御案内をして参加を呼びかけております。広く皆様にまず知っていただきたいと考えております。

（構成員）

やさしいまちづくりっていうと何となく言葉のニュアンスからソフト面のやさしいまちづくりのイメージがあるのですけれども、こういうふうにハードな施設としての意識ってすごく大事だなと思います。資料２－３の中にある認知症の方、本人とか家族の御意見の中にも、何かお魚とか肉の絵を書いてほしいとかですね、そういうふうに書いてらっしゃるので、多分視覚的なことって大事なのだなと思います。

私もこういう会議に出て初めてこういうものだと知ったので、市の方で啓発なさるのは良いことだなと思いました。ありがとうございます。

（代表）

その件に関しまして、本当に普及啓発が広がっているところでありますので、我々も含めて、理解と啓発に努めていきたいと思っております。

やはりデザインが違うと変わってくるということが明らかになりつつあるということが分かって証明されていくことになりますので、具体的にまだ進むのではないかと期待しているとこでございます。

（構成員）

今のことに関連してなんですけれども、家族の意見の中にも市民センターのような身近な施設で広がる場っていうところで、まず市民センターの中でこのデザインをどんどん取り入れていくことができれば広がりやすいし、センターに来られた地域の方にも広がりやすいのではないかと思いました。

認知症にやさしいまちづくりというところでは、やはり市民センターが地域活動の拠点になっているので、市民センターの中でどんなふうにこれを啓発していくか、取り入れていくかとか、市民センターの中で市民にどういうふうに地域の中に広げていくかというのは一つの鍵かなと思っています。

例えば防災だとか子育てとかも、市民センターを中心に地域の中で会議をしながら取り組みを広げているところですので、やはりこれもパッケージとして届けたり、市民センターの館長に対する研修とかをもう少し充実させても良いと思います。

こういうところは、地域振興課、地域づくり部とかそういうところとの連携も必要かなと思いました。

それから、地域活動の中でリードしていく人材づくりというのも、地域の中の人材づくりもとても大切と思っていて、北九州市はずっと女性リーダーとかを育成してきましたけど、今現在活躍した地域活動している人の中に、やはりそういうところで養成されたリーダーが、社会福祉協議会だとか自治会だとかまちづくり協議会で活躍しているので、高齢になる前の時点から、先ほど子どもさんのことが出ましたけど、そこら辺の人材育成のところも、例えば、他の部署と連携してできるようになっていければ、もっと広がっていくのかなという思いを持っています。

特に若いとき、子どもの時からこういうことに触れる機会をどうやって作っていくかということを考えたときに、地域の中でいろんな行事だとかそういうものの中にこれが取り入れられていけばいいかなと思います。

それからもう一つは、地域の中で、どういうふうにしていくかというところに、認知症の方が参加できる具体的な例が積み上がっていくと良いと思います。

私たちが民生員をしていて、地域のパトロールとか出て行く時も、認知症の方をお誘いして一緒にパトロールした例もあります。そういうふうにできることが分かってくると、こういう時は一緒に誘って活躍していただこうとかいうこともできるので、そういうテーマからこの施策を進めていく中で、積み重なっていくと良いかなと感じています。

（代表）

非常に貴重なご意見でございます。

専門職のみならず、地域の方の人材の育成とかのことも含めてという御意見でございました。ありがとうございました。

（構成員）

２ の認知症にやさしいまちづくりの、1番の認知症の理解の増進と共生の推進の主な取り組みのところで、（新）のピアサポート活動支援というのが入っています。今、家族の会の委

託を受けて本人交流会というのを始めているところなのですけど、御本人の参加が難しいというかですね、認知症に不安がある人とか、将来、そういう姿っていうことで不安があるとかいう方達をたくさんお誘いすれば良いのかもしれないけど、本当に自分が認知症なので、一緒にこうみんなで話し合っていくっていうような交流会の難しさを感じております。

それでピアサポートというのは、今、病院とかで診断を受けた後、御家族がその御家族の相談に乗るという動きもあるようですけど、ピアサポートというのは、御本人が御本人の相談に乗るという、そういう支援を考えての計画なのでしょうか。

（代表）

ピアサポートの具体的な内容というか、当事者同士、本人同士なのかということの御質問ということですね。事務局で何か御回答可能でしょうか。

（事務局）

ピアサポートの活動支援は、当然本人同士の活動、それから介護されている家族などの活動、そこも含めて広がっていけばと考えております。

認知症の方は、役割を取らずに、できることはやっていきたいというような御意見もございますし、それぞれの方がそれぞれできる範囲で活躍していただける場ができていけば良いと考えております。

（構成員）

認知症の御本人も少しずつ声をあげられるようになって、自分もこんなことをしたいと思われる意見も出てきているのですが、やはりまだ社会で活躍したいと先ほどもよくそういう話がありましたけど、例えば喫茶店みたいなところですね。それからオレンジカフェとかを開催した時にそこで活躍するとか、いろいろ考えていることはあるかと思うのですけど、先ほどの計画でもありましたが、NPOがそういう場所を探してオレンジカフェをするとかいう時に、場所がない、資金もないというような現状に突き当たるのです。

そういう活動したいけど資金がないような団体に、支援をどんなふうにするのか。空き家だとか空いているところを紹介してもらって安く貸してもらうような連携を作ってもらうとかですね、そういう活動しやすいような支援をしていただけたら、認知症の御本人が活動できる場をこれから作っていくときにとても助かるかなと思います。

（代表）

ありがとうございました。

要望ということで受けとめていただければと思っています。

当然ながら、活動の場がないことには動けないというのがありますので、いろんなところの協力体制等も必要になってくるのかと思いますので、それも一つの今後の計画の課題なのかなと感じるところです。

（構成員）

これはちょっと質問になるかと思うのですが、（オレンジプラン資料）ページ２の認知症の理解の増進のところで、拡充項目に認知症サポーター養成講座というのがあります。

私もこれが始まった初期にサポーター養成講座を受けてオレンジリングをいただいた 1 人ではあります。ただ、サポーターを一度養成しました、その次の 3 ページには、現状値令和 4 年には 10 万人はもういらっしゃるというような環境になっているようですけれども、では、そのカウントされたこの方たちの中から、例えばトレーナーじゃないですけど、もうちょっと上の人を養成し、さらに地域のいろいろな市民センターとかに出向し、というような段階的な認知症についての広報というか、そういう御計画があるのかという質問が 1 点です。

もう一つが、私たち看護協会も、町の保健室という出前授業みたいなことで健康フェアに出たりとか、ちょっとどこかの街角借りてみたりとかして、認知症の認定看護師というのが協会の中に、福岡県の中にも全国にも多くいますので、そういうものを一緒に行って、御高齢の方が町の保健室に来ますので対応するんですけれども、認知症になる不安もあるが、何を質問していいかわからない、私は今そういう状況じゃないかなと思われてしまい、結局血管年齢の方に行ってしまうんですよね。

やはり、こういうところの理解が実際に予防となると、もう少しもう一つ踏み込んだ理解のさせ方って言うとちょっと語弊がありますけれども、理解をしていただく方策というか、せっかくこの拡充のところにもかなり入っていると思うのですが、どうなのかなあと思いながら、うちの協会の認知症の認定看護師も使っていただきたいという、一緒にタイアップしていきたいなという思いもありますし、いかがでしょうかというところです。

（事務局）

心強いお申し出本当にありがとうございます。

ぜひ、認知症認定看護師とのタイアップの件、今後御相談させていただければと思います。

認知症サポーター養成講座は先ほどもありましたように 10 万人を超えているところでございますけれども、その後、どのように地域で活躍しているのかっていうところが、私どももちょっと掴め切れていないところがございます。

また実際、地域で活動していただくためのステップアップ講座というものがあるのですが、それは認知症サポーター養成講座に比べて、ちょっと開催回数も少ないという状況でございますので、来年度はまずこの認知症サポーター養成講座のステップアップ研修を増やしてい

きたいというのが一つあります。

それから今、認知症サポーター養成講座を受けていただいている方に、認知症サポーターメールというのを登録していただいて、今行方不明の方とかが出たりした時に、情報を流したりとか、あと例えば、市のイベントとか、研修の内容とかも流したりしてはいるんですけれども、それを活用することで、何か地域との繋がりとか、そういったものに利用できないかというのも今後検討していきたいと思っております。

また先ほども、子どもさんが捜索模擬訓練等でも、今は減っているというようなお話がありました。子どもさん向けの認知症サポーター養成講座というものもやっているのですが、なかなかコロナもあって回数も減っておりますので、例えば認知症サポーター養成講座っていうのが、市の方が主催して定期的にやっている講座と、それから出前講座という形でやっているのですけれども、子ども向けについては、市の主催でやっているものがありませんので、今後は夏休み等にそういった子ども向けの講座を企画するなど、子どもさんの方にも裾野を広げていきたいと考えております。

地域によっては、認知症の取り組みを進めていく中で、地域の方が独自に地元の小学校や中学校に声掛けをして、一緒に勉強するといったような地域も出てきてはおりますけれども、私どももやはり、そういった子どもさんへの取り組みっていうのも進めていきたいと考えております。

（代表）

ありがとうございました。

非常に貴重なご意見だと思います。北九州方式がまた新たに出てくるかもしれません。

（構成員）

資料 2－2 にも書いていますけど、認知症はマイナスのイメージが強いと書いてあります。企業からすれば、多分認知症になったとしたら、従業員がなったとしたらもう働けないのじゃないかと、そう思っている方が多いと思っています。

そうではなくて、軽度の方であれば、ちょっと配置転換するとかいろんな働き方ができると思っております。そのところの理解が、多分、経営者側についてはまだまだ、なかなか進んでないというところがありますので、そういうところ企業のそういった経営者側に対しての啓発というのが大変重要だと思います。

よって、そういった企業の経営者が参加できるシンポジウムだったり、セミナーだったり、あと出前講演で企業の管理職の研修だとか、そういったところに派遣して、ちょっと説明していただいて理解をいただくと、そういった取り組みを、どんどん地道にしていく必要があるのではないかと思っています。

これからは、やはり人材不足ということで定年もどんどん伸びていきますので、そういうところでやはり健康は大事だと。働いていれば、認知症も軽度であれば進むのを防ぐことができるのではないかと思いますので、そういった働く場をどんどん増やすという意味でも、経営者に認知症ということをよりよく理解していただくというのは、重要になってくると思います。

それについては、また我々も協力できればと思っていますのでよろしくお願いいたします。

（代表）

このオレンジプランの部分について、テーマとしては 2 ページにあります。オレンジ色の一番上のところですが、これが、目指すべきゴールで「認知症にやさしいまちづくり」という施策の方向性。いわゆる北九州市のオレンジプランのテーマでございます。

先ほど甲木構成員もおっしゃってくださいましたように、やさしいという表現でハードもソフトも含み込むというようなことで非常によろしいのではないかという意見もありましたし、もしくは、小野構成員が最初に言ってくださった「主人公」だということ、そこで今日の会議の風が少し変わったなと思う瞬間がありまして、そういったことも良いのかなと思いますけど。

テーマについて何か良い案といいますか、何か御意見がこれにありましたらと思いますが、どうでしょうか。難しいですかこれは。

（構成員）

代表が御指摘された「認知症にやさしいまちづくり」。

認知症のことによく携わっている方々はこれを聞くと、何も違和感はないのですが、これ、意外とこの表現でずっと前から使われるのですよね。だから認知症の人にやさしいとかですね、一般の人をどうとらえるか。

認知症の人にだけにやさしい、というように取られるかもしれない、言葉の受け取り方として。そうなると、「認知症の人にもやさしい」という国語の使い方をしないといけない。意外と一般的には、「認知症にやさしい」というと、認知症にだけやさしいのかと、我々はどうだという対極の意見が頭をよぎるということを以前聞きました。一応ちょっと参考意見です。

（代表）

そういった考え方ももちろんあるということでございますね。

やさしいというふうな、認知症というのはこれが人なのか、全体像なのかいろんなとらえ方もありますので、因みにではありますけども、ちょっとあの福岡市の方があるそうですけども、認知症フレンドリーシティでしたっけ、テーマがそうなっているそうです。

またこれがまた横文字が入っていますしね。フレンドリーシティならば、カインドリーシティなのかというような話になってくるでしょうけども。いろんな言葉があるかなと思っております。

ですので、その辺、最初に人情、ビジョンのとこでありますが人情も出てくるということでありますけれど、もし何か、お気づきの点とかご意見がありましたら、なかなかここでは出しづらいかなと思いますので、事務局の方にまた意見を出していただければと思います。ぜひお願いしたいと思います。

（構成員）

新聞記者をしておりますので、言葉が「に」なのか「にも」なのかっていうところですけれど、私はもうこのタイトルは素晴らしいと思っています。

認知症にやさしいって認知症当事者のこともあるかもしれないけれども、認知症の家族とかも含めると、これに当てはまらない人ってほぼいないと思うのですよね。

今、そうじゃなくてもいずれなるかもしれないし、なので私はもうこの、このキャッチコピーというかこのタイトルがもう完璧に近いのではないかと思います。

（代表）

その他、よろしいでしょうか。オレンジプランに関して、アウトプットの目標値の設定とか、そういうところも何かございますでしょうか。先ほど少し認知症サポーターの養成者数、これに対するトレーナー数の設定とかいうような要望なども出ております。

（構成員）

2ページの認知症の予防という言葉なのですけど、法律にも、2の1にも予防という言葉が全部出てくるのですが、やはりこれまで家族の介護で、予防と書いてあると、認知症にならないようにするという理解になってしまって、認知症になっても困らないっていうか、備えをするとか認知症の発症を遅らせるとか、そういうふうにとらえて欲しいということを言っているところです。

予防というと、認知症にならないようにするという理解になるのではないかなと思って、認知症になることがあまり良いことじゃないっていうか、ならないようにしようっていう、やはり誤解されるようになるので、この施策の中に備えとかそういう言葉を入れて、施策ですからその中に入れてもらったら良いのではないかと思います。

（事務局）

おっしゃる通りその認知症の予防っていう言葉だけだと、認知症は誰でもなりうるものということもありますし、今の時点で完璧に予防するというのは難しいというのは、認識しているところです。

試案の 61 ページの一番上のところに、認知症の予防という言葉を使う時は「認知症にな

るのを遅らせる、認知症になっても進行を緩やかにするっていうこと」となっておりますので、一応その文面は入れておりますけれども、柱の名前だけ見たときに、そういったイメージが出るということは、この件については検討させていただければと思います。

（構成員）

この認知症の予防のところですね、部分で健康受診促進だとか、高血圧ゼロのまちとかありますけど、ここに、耳、難聴のところも入れていただけたらなと思います。耳が遠くてなかなか人との会話ができない。それで私たちもサロンなどしてるのですが、どうしても孤立するんです。1 人聞こえないと、やはり御本人がだんだん孤立化して来なくなってしまうのです。聞こえないということで。

高齢者の方で耳の不自由な方、難聴の方が増えたので、そういう難聴検診じゃないですけど、それと補聴器ってすごく高いんですよね。だからなかなか買えないという方もいらっしゃるので、そういうところに何か補助とかが出ればいいのにと思っております。

（代表）

御要望ということで、ありがとうございました。

（事務局）

難聴と認知症の関係については、今、国の方で検証が行われている段階でございます。

市としては、その結果を見て判断したいと考えておりますが、国の方の調査結果がなかなか出てこないという状況でございます。

（代表）

検討中ということでございます。

（構成員）

確認ですけど、先ほど事務局がおっしゃられた認知症のところで、健康リテラシーの向上というのがあると思いますが、具体的に一般の方に知識を広めるというような理解でよろしいですか。

（事務局）

はい。そのとおりでございます。

議題3について、事務局から報告

（構成員）

先ほど言われましたオレンジミーティングなのですけが、これは大変私も参加させていただいたのですが、大変良かったと思います。

その一つは、やはり御本人の意見というところで、今村代表がイニシアチブとられて一問一答で質問等されており、明確に丹野さんがお答えになって、例えば店舗の床にも、魚とか肉の表示があった方が良いとか具体的なところが非常に良かったと思います。

こういったことをもっと、これは関係各所の人が多かったと思うのですが、一般のところにでも伝えていけるような何かシステムを作って欲しいなと思います。

例えば、認知症サポーター養成講座、あれのメイトさんというのは、私もメイトですけど、そこに丹野さんのような方を 1 回呼んでいただいて、何かしていただくのも良いのかなと、これは要望でございますけど、これは引き続きやって欲しいと思います。

もう 1 点ですけど、認知症月間の時に、以前はメインの駅とかでちょっとお配り物をしていました。それが多分コロナ禍でやれなくなって、私は最初から、最後のとこまで配らせていただいて参加していたのですが、その再開みたいなことは、今後予定はありますか。

（代表）

はい。ありがとうございました。

研修会といいますかシンポジウムの件と今後の認知症月間での活動についての、何かございますか。

（事務局）

講演会の方は、御本人の御意見がいろいろ聞けたというのが非常に良かったという御意見を皆様からいただいております。

また、そのサポーター養成講座のキャラバンメイトの方や、そういった研修の感想のアンケートの方にも、やはり御本人の意見とかいうのが大変大切なので、そういったものを聞きたいというお話も伺っておりますので、その御本人を招いた研修会等についても今後検討させていただきたいと思っております。

また街頭啓発の取り組みについては、以前、新型コロナの発生する前は街頭啓発を行っていたところでございます。

コロナ後は、そういった啓発活動の方は行ってない状況です。

（事務局）

補足で、今年度、老いを支える家族の会の方で、小倉駅の JAM 広場で、9 月にみんなの

作品展を実施していただいておりまして、その場でも啓発を行っていただいているということで伺っているところです。

街頭啓発については、なかなか配っても受け取っていただけないとか、そういった課題もありつつ、コロナもあって、ここ何年かはやっていないという状況なので、効果的な、どういった啓発方法が良いのか、今後、皆様の御意見を伺いながら考えていきたいと思っております。

御意見ありがとうございます。

（事務局）

最後 1 点だけ今後のスケジュールについてご説明させていただきます。

あと残り、分野別会議が二つございます。

本日の会議のご意見を踏まえてまとめさせていただいて、今月中に調整会議を開催いたします。

それで、その意見を踏まえて素案、試案たたき台とさせていただいておりますけども、素案を作りまして、12 月の中旬に議会の常任委員会の方にお諮りし、それからそのあと 12 月中旬から 1 月にかけてパブコメパブリックコメントを実施する予定にしております。

その際には、また委員様の関係団体の皆様に御協力等をお願いするかもしれません。どうぞよろしくお願いいたします。

そのパブコメを経て、また素案を見直して最終的な案を決定し、3 月議会に諮って、今年度末までに計画を策定する予定になっております。

スケジュールについては以上でございます。

（代表）

それでは活発なご意見をいただきまして、ありがとうございました。